

猿新聞

編集・発行
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

外来種と環境問題

自然破壊の要因は多岐に渡りますが、最近、外来種問題がクローズアップされています。
地球上に棲むありとあらゆる生き物が、数十億年もの時をかけて築きあげてきた生態系は、今、崩壊の危機に直面しています。

外来種は本来、日本に生息していなかった種であることから、在来種との競合など生態系に大きな影響を及ぼしています。
それに伴い、農業生産にも大きな打撃を与えています。

私達の住む環境は、生態系の絶妙なバランスの上に成り立っていて、人を含む全ての生き物が自然の恵みを受けています。
今、外来種によって生態系の絶妙なバランスを破戒されようとしていることを、私たちは自覚しなければなりません。

本来彼らは、その生息地では、ごく普通の生き物として生活していたもので、たまたま、導入された場所の環境条件が彼らに適応して生き延び、その場所が大きな影響を引き起こす要因を持っていたに過ぎません。

また、外来種全てがその環境に適応し野生化するとは限らず、むしろ稀だとも言われています。
だが、一旦野生化し定着すると、きわめて深刻な問題をもたらします。
問題は様々ですが、在来種の餌を横取りし駆逐したり、在来種の近縁の種

特定外来種アライグマ

3月4日 宇陀・名張地域鳥獣害防止広域対策協議会主催。

名張公民館に、アライグマの第一人者、川道美恵子氏を招き「アライグマ対策について」の研修会が開催されました。
当日はあいにくの雨天の中、多数の市民が参加され、アライグマ被害に対する関心の深さが伺われました。

名張市農林振興室の平成23年度被害調査では、平成17年頃より目撃情報があり、イチゴ園や菜園等での被害や家屋での繁殖も確認されている。
現時点の捕獲報告数は、年間30頭程度であるが、今後増加が懸念される。

23年度、アライグマによる被害は、ほとんどの野菜類で総額220千円。被害面積4畧。
また、名張市では、登録した市民に捕獲檻を貸し出し捕獲報償金を出して、被害防止対策を推進しています。

因みに、アライグマ捕獲報償金は一頭に付き1,000円。
講演概要
アライグマは、北米が原産で、果実、農作物、人家の残飯に至るまで幅広い雑食性。
出産時期は定着した地域で異なる。
繁殖は1回に3〜6頭も生み、妊娠に失敗したリ子供が死ぬともう一度妊娠することもあるという。放っておけば恐ろしい勢いで増える。日本には天敵もいない。

1970年代に放映された「あらいぐまラスカル」により、ペットブームが起った。飼いが持て余し、野山に次々と捨てられる結果を生み出した。
アライグマは、民家や社寺の天井裏に住み着く。周辺を観察し足跡、柱などに爪痕があれば住み着いている可能性がある。高い。追い出しにはバルサンをたくのが効果的。



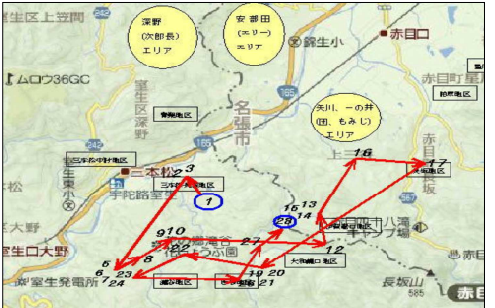
名張市では捕獲檻を貸し出しています。
●捕獲個体取り扱い上の注意事項。
○感染症予防の3原則。
○防護衣着用の徹底。
○手指洗浄の徹底。
○使用器具の消毒あるいは廃棄交換の徹底。

サルは餌場を求めて常に動き回っています。季節によって活動域が変化するため、被害が発生する季節によりバラツキがあります。
森の変化にも敏感で、天然の広葉樹林が実を付ける頃は、サルの活動域は、大きな広葉樹林を中心に、

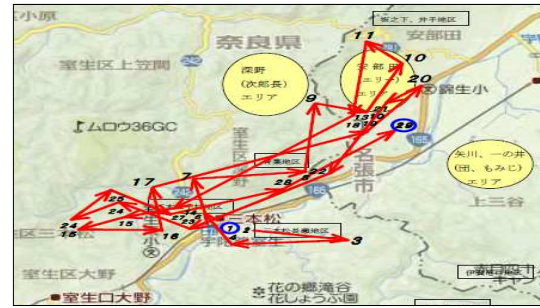
B群活動域変わる

集落の防除対策の強弱もサルの接近回数に大きく影響します。
MDによる追い上げで、群れの集落への接近回数が減少し、その活動域も変化することが、実証されています。

寒暖にも敏感で、寒い冬場は南受けの暖かい山の斜面。夏場は北受けの涼しい森の中を好みます。
「名張鳥獣害問題連絡会」ではホームページで、名張A・B群の移動図を掲載していますので、防除対策の参考にしてください。
右の移動図はB群の昨年12月の状況です。



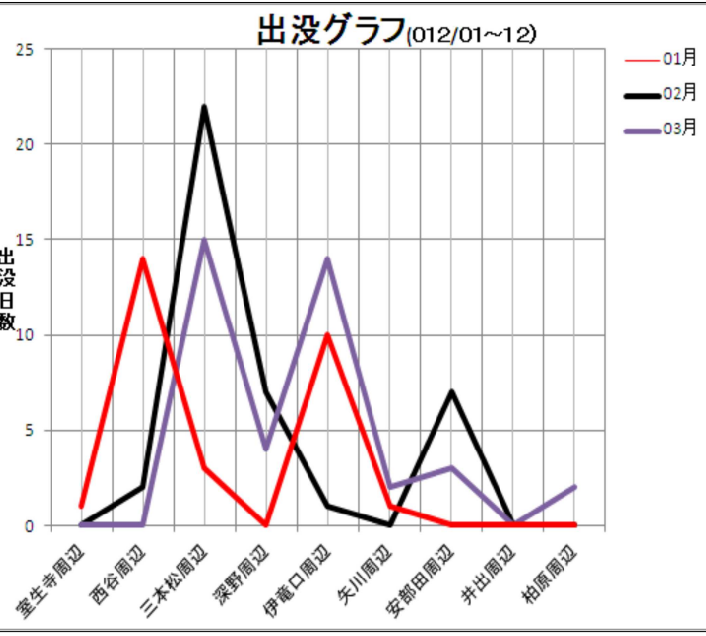
このように昨年はR165を北に超えることなく、三本松、西谷、宇・竜口、伊・竜口、砥取り周辺を遊動していました。
それが、今年2月に入



被害対策の一環として、収穫しない柿木の伐採が奨励されています。
名張市でも多数の柿の木が伐採され、畠の隅に捨てられているのが、見受けられます。
「モッタイナイ」、資源として再利用すべきです。
山林保護の名目で伐採された竹にも、同じことが言えます。
『伐られた柿の木再利用でシメジ自然栽培』。

柿の木でシメジ自然栽培

柿の木は、シメジ栽培に最適です。
伐採期は、紅葉期から翌春の休眠期頃。
《玉切り》
12〜15日に切り口の合ったものを2〜4組とする。接種の時期は2〜4月頃が適当である。
【混合種菌の作り方】
種菌：1000g、米ヌカ：2リットル、オガコ：4リットル（新鮮な広葉樹のオガコ）
右記の割合で混合し、更に水を加えてドロドロ状の混合種菌とする。



柿の木は、シメジ栽培に最適です。
伐採期は、紅葉期から翌春の休眠期頃。
《玉切り》
12〜15日に切り口の合ったものを2〜4組とする。接種の時期は2〜4月頃が適当である。
【混合種菌の作り方】
種菌：1000g、米ヌカ：2リットル、オガコ：4リットル（新鮮な広葉樹のオガコ）
右記の割合で混合し、更に水を加えてドロドロ状の混合種菌とする。
原木の木口に混合種菌を4〜5mmの厚さに塗り、その上に別の原木を隙間のないようサンドイッチにする。
《仮伏せ》
原木（1組）を2〜3段に積み重ね、周囲と上部をコモ・ワラ・ポリ等で被覆する。10〜15日で白く発菌してくるが、発菌しない場合は灌水して発菌を促すようにする。
この期間中は櫓木を絶対動かさないように注意。
《本伏せ》
7月頃、直射日光の当たらない林内で排水の良好な場所が適当だが、畑・宅地の利用も良い。
密着している櫓木を1個ずつ離し、接種した面を上にして土中に8分程度埋め込み、上部をワラ束で被覆する。
直射日光には絶対に当たらないようにして湿度70〜80%を保てるよう適宜散水する。
種菌は、井上農園（瀬古口）で販売しています。

里山の復活

最近では毎日鹿やイノシシの被害のニュースを聞かない日がないくらいに報道されています。
私が子供の頃はシシやシカ、サルなどまったく目にすることもなく、ひとかどの猟師でさえシカを見るのは運が良くても年に一回ぐらいだとも言われていました。

昔は、野生動物が棲む奥山と人里は、里山で隔てられていて、動物たちが入り込む余地がありませんでした。
当然、野生動物による被害は、皆無と言っていいほどありませんでした。ところが、この頃では人が山に入らなくなり、当時人が食料にしたタケノコやアケビ、栗などが、里山にあふれかえっています。

食べ物豊富で、しかも安全な里山を見過ごすことなく、今、里山は野生動物の棲家になっています。
里山に餌のなくなる季節には、近くの田畑に侵入し被害を起こします。これが獣害の時系列的まとめです。
過去を振り返り、獣害を引き起こしている大きな要因は里山の崩壊ではないでしょうか。

早急に昔の里山の構造を取り戻し、人と野生動物との圧力関係を復活させ、共存を図らなければなりません。又、里山の復活は、生物多様性を守ることに繋がります。